

漫画家・文筆家

ヤマザキマリさん

60歳になったら、油絵に戻りたい

14歳で出会ったヨーロッパの画家をめざして

自由奔放な母親の影響を受けて、高校2年から11年間にわたりイタリアへ留学された漫画家・文筆家のヤマザキマリさんに、ヨーロッパと日本の文化の違い、自分らしい居場所の探し方を語っていただきました。



中学2年で、 単独ヨーロッパ旅行へ

中学2年の時に、母親に「行って来い」と言われて、独りでヨーロッパを旅行しました。音楽家の母親の知り合いがフランスとドイツにいたので、母親としては、学校での教育よりも子供には良い経験になるだろうと判断したのでしょう。でも今思えば無謀なことです。

当時訪問したヨーロッパの美術館には、貧乏であったかもしれないし、まだ若くして死んでしまったかもしれないような画家の絵が展示されていました。14歳の娘が、そういう画家の生活した状況を知って、画家になりたいと思うのか、それともあきらめて経済生産性のある方向に進んでいくのか。たぶん、母親は試したのだと思います。

自由奔放な母親からの一言

母親は自由奔放な考え方を持っていて、子育てはこうじゃなきゃいけないとか、教育はこうじゃなきゃいけないとか、そういう既成概念にとらわれない人でした。昭和一桁生まれの母親の若い頃は、女の人が音楽を生業として独り立ちすることを、まだ否定されていた時代です。そんな時代に、楽器を抱えて独りで東京から北海道へ移住し、自分の道を開拓した人なので、日本の教育の方針が、すべての子どもに向いているとは限らないと、自分の身をもって実感していたのだと思います。それに母親自身、仕事が楽しく最優先だったようで、子育てはその次ぐくらいに考えていたのでしょうか。そのおかげで私も妹も気楽だったし、親からの期

待に応えなければならぬというようなプレッシャーもありませんでしたから、自然に自分で考え行動するようになっていきました。

高校1年の時に、母親の力強さを感じた出来事がありました。高校の校則には、肩より長い髪の毛は三つ編みにしなければいけないとか、こまこまと書かれていました。私は、そのことが腹立たしく感じ、校則に対する反発で髪の毛をすべて剃りました。夜遊びもするようになっていきましたが、母親は私の変化を認めてくれました。

結局、そのことが学校に知られて母親が呼び出されたのですが、『お宅はどういう教育をしているのですか?』と言われた際、母親は「私は、自分の娘を信じていますから」と、一言伝えたのです。

二人称で語る、 リーダーの安心感

大陸でつながっている国は、昔からいろいろな民族が行き来し、いろいろな文化が入り混じり、互いの宗教や思想を認めざるを得ない社会です。個々に考えを持ち合せた人々をまとめるための熟練したテクニクが発達しています。反面、島国の日本は、昔から限られた領土の中で、人間関係などをうまく調和する工夫がなされてきた社会だと思います。異民族や異文化に触れるリスクが少ない

国なので、些末なことでも意見を合わせ、ちよつとも突出した考え方を排除することで、国として一律化し、まとまってきたように感じます。

その結果、事なかれ的に統括しなければ、うまくまとまらない性質を持った国民性になったと思います。

それは、グローバルズの現場でも顕著で、コロナウイルスによるパンデミックに対する各国のリーダーたちのスピーチからも伺えます。

ドイツのメルケル首相は、まっすぐ前を見て『そこに座っているあなた、そこで医療に従事して頑張ってくれているあなた、ありがとう』というふうに二人称で激励します。そして、「大丈夫、頑張りましたよ。きつと乗り越えられるわよ」と説得力のある言葉を掛けます。

ヨーロッパのリーダーたちはメモ用紙なんか見ずに、リーダーとして選ばれた尊敬をきちんとリスペクトしたスピーチができます。でも、日本人のリーダーは励ますことが苦手だから、私たちはすごく不安になって、どうしたらいいのかと悩んでしまいます。

そんな状況だからか、みんなインターネットやSNS、ニュースに頼り、どこかに自分達がすぐれる言葉を探す様子は、神々を称える神代の時代から続く日本らしさなのかもしれません。

例えば、卑弥呼ですよ。卑弥呼の啓示を受けることで安心する、遠い昔から

続く国民性のDNAを感じます。

自分らしい居場所をみつける

かつて日本人が心の拠りどころとした卑弥呼は、まさに現代の子どもにとつての親の役割をしていたと思います。しかし、不安ばかりを感じている現代の親は、卑弥呼のように子どもに安心を与えることができませぬ。

例えば、いじめ問題です。子どもが帰ってきて落ち込んでいる様子を見て、お母さんは、不安を感じて「どうしたの、今日は?」と聞くでしょう。子どもはいじめられたことを母親に言うべきか悩みながら、母親を信じ「実は、いじめられた。」と答え、すると多くのお母さんは世間体を気にして、「どうしていじめられるようなことになったの?」と、子どもが何かをしてしまったのかと不安を感じてしまいます。「社会に対して、あなたの方が何か間違えたことをしたのでしょうか?」という指摘もしてしまうのです。子どもは、悩んだ挙句に母親を信じて告白したのに、唯一味方の母親から攻められてしまったのは、裏切られたと感じてしまうでしょう。それが、何度も繰り返されれば、子どもは学校にも家にも居場所がないと思ってしまうのではないのでしょうか。

私の場合は、世間体を気にしない母親でしたから、子どもの頃は安心できる居

場所がありました。学校の先生にも子どもを信じているからと伝えることができる信念を持っていた母親でしたから。

50歳代になった今は、自分で安らげる居場所を探さないといけないのですが、常に仕事に追われています。夢や憧れですが、60歳代になったらマンガ家という体力のいる仕事からは遠ざかり、14歳の時にヨーロッパの美術館で見た絵を描いた画家たちのように、私も自由気ままに油絵を描き、安らげる居場所を見つけないと思いません。

Yamazaki Mari

漫画家・文筆家。東京造形大学客員教授。1967年東京都出身。84年にイタリアへ渡り、フィレンツェの国立アカデミア美術学院で美術史・油絵を専攻。比較文学研究者のイタリア人との結婚を機にエジプト、シリア、ポルトガル、アメリカなどの国々に暮らす。2010年『テルマエ・ロマエ』で第3回マンガ大賞受賞、第14回手塚治虫文化賞短編賞受賞。2015年度芸術選奨文部科学大臣賞新人賞受賞。2017年イタリア共和国星勲章コマンドーレ綬章。著書に『ステーブ・ジョブス』(ワルター・アイザックソン原作)『プリウス』(とりみきと共著)『オリンピア・キェクロス』『国境のない生き方』『ヴィオラ母さん』『たちどまって考える』など。